

野村グループ
presents

ゲルギエフ
記者会見
速報

マリインスキー・オペラ

マエストロ・ゲルギエフ、チャイコフスキーの 「スペードの女王」、「マゼッパ」について熱く語る

チャイコフスキー・フェスティバル
2019について

今年秋の私たちマリインスキー劇場の「引越し公演」は、『スペードの女王』と『マゼッパ』、そして交響曲と協奏曲というチャイコフスキーの作品に光を当てました。これらの作品を皆様とともにじっくりと味わいたいと思います。

マリインスキー劇場は、1860年に創設されました。『スペードの女王』は、最新の技術を導入した限界の無い劇場として2013年に建設されたマリインスキーII（新劇場）が完成した際にも上演しました。マリインスキー劇場では、あらゆる世代の歌手たちがこのチャイコフスキーの偉大な〈スペードの女王〉を歌っています。

この作品は二言というならば、壮大で、力強く、とてもドラマティックなオペラで、皆さんに十分に楽しんでいただける

作品です。新しい演出部分だけではなく、時間をかけて役作りをした素晴らしい歌手の歌声、演技とともに、深い内容のオペラとして舞台を楽しんでいただきたいと思います。

今回の上演演出チャイコフスキーのオペラ2演目「スペードの女王」と「マゼッパ」が、ともにプーシキンの原作であることについて

チャイコフスキーがプーシキンに惹かれた理由がよくわかります。

ロシアのクラシックの伝統、歴史、展開は、プーシキンがいなかったら大きく違うものになっていただろうと思います。

プーシキンの詩に影響を受けた作曲家として、リムスキーII、コルサコフ、グリンカ、ムソルグスキー、チャイコフスキー、プロコフィエフなどがいます。文学者

ドストエフスキー、チェーホフらにも強い影響を与えました。

プーシキンの詩は19世紀から長きにわたり、時代が変っても私達の心に届きます。〈スペードの女王〉は壮大なオペラですが、実際には短い物語。それではながら巍然（ぎぜん）たる作品であることは、プーシキンの偉大さを証明しているといえると思います。

歌劇〈マゼッパ〉について

今年の6月にも白夜祭で上演した〈マゼッパ〉の舞台は、伝統的な演出に基づいたプロダクションで、聴衆に親しまれています。スリムスキーはヨーロッパで引っ張りだこのバリトン、マリア役のバヤンキナ、メゾ・ソプラノのキクナーゼともに非常に優れています。マリアの父コチュベイ役のトロフィモフは私の大好きな歌手の一人、この役にぴったりのバスです。アンドレイ役にはベテランのアキモフという充実の歌手陣で臨みます。

〈マゼッパ〉はミラノ・スカラ座でも上演しましたが、マリインスキー劇場の歌手で上演しました。史実に基づいた演出のほう好まれるようです。今回、日本ではコンサート形式で上演します。いつか機会があれば、この〈マゼッパ〉の舞台での上演をお届けできる機会があるといいな、と思っています。



© N.Ikegami

サンクトペテルブルグ発

マリンスキー劇場 ミハイル・ヴェクア

(テノール/ゲルマン役)
スピードの女王 11/30(土)

タイトルロールの
歌手に聞く



チャイコフスキー：歌劇「スピードの女王」の舞台
主人公ゲルマンをドラマティックに演じ、歌う



© N.Razina

ミハイル・ヴェクア (テノール/ゲルマン役)

2012年「ラインの黄金」ローゲ役でマリンスキー劇場にデビュー。今日覚い活躍を続けるヘルデン・テノール。卓越した演技力には定評がある。初来日。極真空手を習ったこともあり、日本文化に深い興味を抱く。

「スピードの女王」の役柄について、主人公ゲルマンはリーザを愛していて、愛する人への気持ちはとても強いけれども、自分はカード賭博に勝つて、お金が欲しい。結局、ゲルマンは自分の愛よりも欲望の方に行ってしまうですね。

ゲルマンの人生に「愛」が、「愛」というよりは「熱情」が生まれたとき、彼に二つの考えを巡る内面の苦悩が始まります。ゲルマンが恋するリーザは高貴な家柄で、彼のものになるわけにはいかない運命ですが、彼はその運命に抗いたいと思います。ここでゲルマンの内面に激情が生まれます。人は、何が正しい行いなのか、がわかっていながら、時には正しく行動できないことがあります。なぜなら、心のうちに、現実と己の希望や欲望との間に大きな乖離があり、葛藤が生まれるのです。

ラストシーンで、ゲルマンが「スピードのクイーン」のカードを引いたとき、彼の頭の中ではどんな感情が渦巻いているのかお聞かせください。

最初、ゲルマンは運命のカード(3枚目のカード)を見てさえないません。彼はそれがまさに「A(エース)」のカードであると信じ切っていて、「あなたが持っているのはスピードのクイーンです」と周りに言われても、冗談を言っているのだと思います。彼は「何のカードですか」と聞き返し、「スピードのクイーンです」と言われ、「まさか」とカードを見て驚愕します。

プーシキンの原作では、ゲルマンは発狂し精神病院でひたすら「3、7、A...3、7、クイーン...」と繰り返します。チャイコフスキーのオペラでは、

彼の葛藤が行き詰まるがゆえに、自殺以外の選択肢を見つけることができなくなります。

マエストロ・ゲルギエフは、あなたにとってどのようなインスピレーションを与える存在ですか？

ゲルギエフは、現代の卓越した指揮者、天才だと思います。彼の解釈はいつも新鮮で、それは他と較べようがありません。音楽は毎回、新たな生彩を放ちます。そして、ゲルギエフの指揮で、歌手が本領を発揮できます。これは最も重要なことです。(中略)

彼の天才的なところは、歌手に演じる上での自由を感じさせる点です。それでいて、あくまでクラシックの手法に、作曲家が書こうとしたものに依拠します。彼は歌手を助け、表現の翼を与えてくれるのです。



インタビュー全文は <https://www.japanarts.co.jp/news/news.php?id=4184>

「スピードの女王」あらずじ

ドイツ人士官ゲルマンは身分の違う貴族の娘リーザに激しい恋心をもちます。ある時伯爵夫人が、かつてモスクワのヴィーナスと呼ばれた「3枚のカードの秘密」を知る人である事を知った所から、ゲルマンの心に欲望の火が灯り、やがて彼の狂気の歯車が回り始めます。その狂気は伯爵夫人から「カードの秘密」を聞き出し、愛するリーザまでも振り切り、ゲルマンを賭博場に駆り立てます。

しかし「勝ち札」であったはずの3枚目のカード「A(エース)」は伯爵夫人の「呪いのカード(スピードのクイーン)」となつて、ゲルマンは賭けに敗れます。すべてを失ったゲルマンは自ら命を断ちます。

ワレリー・ゲルギエフ指揮 / マリンスキー・オペラ

チャイコフスキー：歌劇「スピードの女王」
原語上演 字幕付 (全3幕) 新演出 上演時間：約3時間30分

2019年 11月30日(土)・12月1日(日) 15:00 東京文化会館
S¥42,000 A¥36,000 B¥29,000 C~E売切 ゲルギエフシート ¥5,000(税込)

ゲルマン：ミハイル・ヴェクア (11/30) ウラディーミル・ガルージン (12/1)
リーザ：イリーナ・チュリロワ 伯爵夫人：アンナ・キクナーゼ / 他 ※出演者は7/31現在の予定です。

チャイコフスキー：
歌劇「マゼッパ」 (全3幕) 原語上演 字幕付
上演時間：約4時間

12月2日(月) 18:00 サントリーホール
S¥30,000 A¥25,000 B~D売切 ゲルギエフシート ¥5,000(税込)
マゼッパ：ウラディスラフ・スリムスキー
コチュベイ：スタニスラフ・トロフィモフ
マリア：マリア・バヤンキナ / リュボフ：アンナ・キクナーゼ ※出演者は7/31現在の予定です。

主催：朝日新聞社 / ジャパン・アーツ 特別協賛：野村グループ 協賛：野村不動産グループ 後援：ロシア連邦大使館 ロシア連邦交流庁(Rossotrudnichestvo)

お申込 / お問合せ：ジャパン・アーツ ぴあ 0570-00-1212 www.japanarts.co.jp/tf2019